

ホテルのニュースレター

日本ホテルの会 2003/12 第27号

トンボ少年のマジック

日本ホテルの会理事 小俣軍平

あれは、今からずっと昔のこと、日本で初めてオリンピックが開催された1964年のことでした。私は、小学校の教員になって11年目で初めて念願の1年生の担任になりました。それまで高学年の担任ばかりでしたので、唯もう嬉しくて嬉しくて、毎日いそいそと学校へ出かけていきました。二週間ほどは、なんだか子どもたちを踏みつぶしそうで気を遣いました。子どもたちは総勢38人で、どの子も個性豊かで面白い子どもたちばかりでした。男の子の中に、H君がいました。彼は日に焼けた顔に大きな目玉がくりくりと動いて見るからに野生児という感じでした。お父さんは会社員、お母さんは学校の先生、4歳年上のお兄ちゃんがいました。彼は、入学してまもなく毎日小さな虫籠にいろいろな昆虫を入れて持ってきては、みんなに見せてくれましたので、たちまち「昆虫博士」と、言われ注目の的になりました。学校から帰ると、天気の良い日は毎日外に飛び出して、近くの野山を駆け回っていました。

7月のはじめの日曜日、そのH君に「先

生、虫取りに行かないか。」と誘われて、当時の梶田町の谷戸の一つ（今の京王高尾線めじろ台駅近く）に出かけていきました。当時はまだこのあたりは開発の波に襲われていなかったもので、緩やかな丘陵地に囲まれた谷戸の水田は満々と水をたたえ、大きくなった稲の株の緑が眩いばかりに輝いていました。トンボやツバメが飛び交い、まだゲンジボタルもゲンゴロウもタガメもいました。

そこで、H君はやおら1m程の棒きれを右手に持って、「小俣先生みていてご覧、面白いよ。」といって田圃の畦道に立つと、自由の女神のようなポーズを採りました。と、間もなくシオカラトンボが飛んできて、その棒の先に止まりました。するとH君は、すました顔で棒きれをスルスルと目の前に降ろしてきました。その間トンボはまったく動きませんでした。間もなくH君は、ゆっくりとした動作で、苦もなくトンボを手づかみにしました。「え？」私は、我が眼を疑いました。信じられませんでした。なんだか夢の世界に迷い込んだような

妙な気分になりました。

「小俣先生もやってみて、面白いよ。」

H君にそう言われて、はっと我に返り、早速私も試みってみることにしました。棒切れを持って田の畦道に立ち、H君の真似をしてポーズを採りました。しばらくしてシオカラトンボが飛んできて止まりました。上出来です。次に息を殺して棒切れを胸の前に降ろす動作に入りました。その瞬間、無情にもトンボはさっと飛び去ってしまいました。

何回挑戦してみても、その瞬間、トンボは私の動作を嘲笑うかのように飛び去って行きました。反対に、H君がやると毎回苦もなく成功しました。私が子どもの頃、立川文庫の中に、剣術の達人戸沢白雲斎が、箸で生きたハエを摘む話が載っていました。その話を思い出して、H君は、持って生まれた超能力があって昆虫と話ができるのでは…。そんな気がしてきました。

未だ、人間が自然環境の一部としてとけこみ生活していた頃、多摩丘陵は、そこに飛び込んでくる子どもたちを、大きな懐に抱え込み感性豊かに育ててくれました。人間形成の根幹にかかわるその力は、20坪の閉ざされた教室空間で、毎日繰り返される若い教師の授業の成果を、遥かに超えたすばらしいものでした。

あれから、間もなく40年になります。多摩丘陵は無残に切り刻まれ、学校もまた点数ばかりがもてはやされる管理主義教育に吞み込まれて生気を失い、人間は自らが作り出した得体の知れない化学物質に侵され、やっと、ことの重大さに気づきはじめ

ています。

H君は現在46歳、中学校の理科の教師です。子どもの心が読み切れないとか、いじめ、自殺、学級崩壊など、現在の中学校教育が直面する深刻な状況とは無縁の、豊かな教育実践を毎日展開しています。間もなく喜寿を迎えるH君のお母さんは、今でもお元気でいらっしゃいますが、お会いすると、「本当は、銀行員にしたかったのに、小学1年生でとんでもない先生に出会ってしまって…。でも、こんな時代になってみると、銀行員にしないで良かったのかもね…」と、笑います。



生息地の特性を活かしたゲンジボタルの保護活動

松崎町立松崎中学校 土屋武彦

【1】松崎中学校ゲンジボタル保護ボランティアの発足

松崎中学校ゲンジボタル保護ボランティアの発足は、今から5年前、私が松崎中学校に赴任した際、以前から保護活動を行っていたゲンジボタルの生息地が台風の被害を受け、復旧作業の協力を生徒に呼びかけたことから始まる。生徒とともに今まで行ってきた主な活動は、生息場所の特性を知り、その特性を活かした環境づくりである。生息地と同じような環境にしていこうることにより、ゲンジボタルの保護につながる考えた。

保護活動も今では、地域の関心が高まり、一般の方の協力や小学生の自然体験活動との連携事業として行われるなど、活動の輪が広がりつつある。保護活動は町の中心を流れている那賀川という2級河川で行われているが、今まで台風などの増水で川の州や流れの様子が一変してしまい、保護活動の苦労が無駄になってしまったこともある。

【2】河川の州における小川づくり

保護活動は川の州の中での小川づくりから始めた。那賀川の主なゲンジボタルの生息地は、①山を背にした大きなアシの州がある。②州には主流から分岐した小川や山の沢からの水が流れ込んでできた小川がある。などの特徴が見られ、アシの州に流れている小川とゲンジボタルの生息が関係し

ていると考えたのである。

最初の小川づくりは、那賀川の生息地のひとつで、最も大きな州のあるところである。山から流れ込んできた沢の水が州のところで分岐し、ひとつは下流に流れ60mほどの小川となり本流と合流。もう一つは、反対側40m程先で流れがせき止められ、川幅約3m、深さ1mの細長いため池になっていた。水は不透明、溢れた水は下流の小川に逆流していた。本流までは20mほどであった。この部分を掘り抜けば約60mの小川になるところであった。本流への水路づくりは、生徒達のスコップによる手作業。最初は、地表が砂地で順調に進んだ作業も、次第に竹の根や石の層で思うように作業が進まなくなった。深い所で1mも掘



り下げ本流への水路を完成させた。水路ができてから5年が過ぎ、周辺の竹も切り取られ整備されてきた。そのため日の光も射し込み、今では草も生え自然な小川になった。ゲンジボタルも数匹ではあるが小川の上を飛び交うようになってきている。

那賀川の州の中には、アシにおおわれた小川や枯れ草などが詰まっている小川も見つかり、それらを取り除き、流れのある自然な小川にしていった。また、途切れ途切れになっている小川や小川の跡に水路を掘りつなぎ100m以上の小川にもしていった。州の中にできた小川にはカワニナの生息地となっているところも発見できた。

【3】ワサビ田づくり

私たちの町は昔からわさびの生産が盛んに行われているが、ゲンジボタルの発生するワサビ田が何カ所か確認されている。調

査によると、カワニナはワサビを好物にしワサビ田によく発生する。生産者は駆除に苦勞するほどである。

また、ワサビ田は、適度な流れがあり小石まじりの砂利であるため、ゲンジボタルの幼虫の生息にも良い環境であった。自分たちでワサビ田をつくりゲンジボタルをもっともっと生息させようと、小川づくりと平行して3年間かけ生息地付近にワサビ田を完成させた。これからワサビの生育に従いカワニナを養殖し、ゲンジボタルを生息させる試みも計画している。

..... 読者投稿「私とホタル」.....

「三螢・四場所」

三池南北

私が蛍に関心を持ち始めたのは昭和26年のことで、柳川・立花藩の藩校であった傳習館高等学校へ入学した丁度その年に、岡忠夫先生（もと全国ホタル研究同好会会長）が、原志免太郎先生の御教示の下、ゲンジボタルの飼育研究を開始された時からである。私はその岡忠夫先生に師事して生物と柔道を教わった関係で、先生の研究を垣間見ていたのである。それが私の蛍のスタートポイントとなった。

その後、私が名古屋に勤務していた昭和46年8月のことである。岡先生から連絡が入り、明日岡崎へホタルのことで行くか

ら案内を乞うとのことであった。早速に名古屋駅でお迎えし、車で岡崎へ御案内した。その結果、全国ホタル研究同好会第5回岡崎大会に半強制的に出席させられ、同時に入会することとなった。それ以後、私は、あちこちの蛍の話を非常な興味を持って集め始め、このとき、私は蛍のステップ2という段階に足を載せたというべきであろう。

岐阜で大会が開催された昭和50年、名古屋城外濠でヒメボタルが竹内重雄さんによって発見されたのが私の蛍のステップ3の始まりとなった。名古屋市内でのヒメボ

タルの発見に刺激され、当時横浜に住んでいた私に、横浜にも探せばヒメボタルが生息しているかも知れないという期待を懐かせたのである。それが私に蛍の中で特にヒメボタルを追っ駆ける契機となった。

それ以来十数年以上続く横浜市内でのヒメボタル探しが始まったのである。春は桜の頃からのゲンジボタル、ヘイケボタルの上陸観察、ゲンジ、ヘイケの初見、ピーク時、終見の観察、更に陸生ボタルの観察と、毎年11月下旬頃まで殆ど毎晩、私のホタル生息環境の調査が続いたのである。その傍ら、あちらの杉林、こちらの谷間、谷戸田、雑木林、草原と、あちこちと市内を夜な夜な巡る柴犬のリキとの夜の散歩が続いたのである。

平成6年の夏になって、とうとう横浜にはヒメボタルがいないのかなあ?と思いつながらも、未だ生息しないという烙印を押すに忍びず、それじゃあ、全国のヒメボタルはどういう所に生息しているのか? どういう植生か? 地形か? 気象条件か? etc.を知るために、私のヒメボタル探しの全国行脚が始まった。

平成6年6月7日熊本県旭志村へ稲葉辰馬氏を訪ねたのを皮切りに、山形県米沢市、岡山県哲多町、大分県九重町、鶴見町、津久見市、宮崎県北川町、高知県中村市、馬路村、熊本県阿蘇町、佐賀県小城町などを見て歩いた。

今年も旭志村(前述)、佐賀県小城町、福岡県小石原村、添田町、山川町、長崎県厳原町(ここはツシマヒメボタル)、熊本県五木村、泉村、久木野村、大分県三重町、九重町、宮崎県川南町、北川町、鹿児島県加

治木町、沖縄県那覇市(クロイワボタル)、鳥取市、岡山県北房町、哲多町、倉敷市、広島県三原市、愛媛県河村などを見て廻った。

これらヒメボタル生息地を訪ねているうちに、標題の全国的にも非常に珍しい三螢・四場所を発見したので、ここに御紹介申し上げる次第である。ここにいう三螢とは皆さんがその生息環境を熟知しておられるゲンジボタル、ヘイケボタル、ヒメボタルのことである。これら三種の螢を或る時刻にじっと立っているだけで、見ることができる場所を私は現在まで、全国に四ヶ所見つけたのである。それを敢て皆さんへ公開するものである。

1. 山形県尾花沢市牛房野

私が初めて三螢を同一場所、同一時刻に見ることが出来た場所であり、先ず第一番目にこの場所を御紹介したい。地元のホタル研究家、星川茂平治先生に案内して貰った、平成13年7月5日午後8時頃のことである。牛房野川に沿ってゲンジボタルが群飛し、その兩岸の水田にはヘイケボタル、それと、水田を隔てて川向うの雑木林に、明らかにヒメボタルが閃光発光飛翔しているのを確認したのである。私は、その感激で胸が高鳴るのを抑え切れなかった。

更めて、ここに星川茂平治先生に深甚の謝意を表するものである。

2. 宮城県東和町鱒淵

平成13年7月9日私は全国ホタル研究会米沢大会に参加した後、宮城県東和町と岩手県大東町の二ヶ所のホタル生息地を見て歩いた。東和町は皆様も御存知のとおり

り、同町鱒渕川のゲンジボタルは国の天然記念物指定となっている。同地のホタル館の約100mぐらい下流の川の左岸に同夜8時過ぎにじっと立って川のホタル(ゲンジボタルとヘイケボタル)を観察していたところ、そこへヒョイと僅か1頭だけではあるが明らかにヒメボタルが閃光発光して飛来しているのを見た。捕まえてみると確かにヒメボタルであった。その背後には雑木林が川に迫って拡がっており、ヒメボタルはその付近から飛来したことは間違いないと思われた。

ここは私1人だけの(私と妻と愛する柴犬リキも一緒だったが)確認だったので、もう一度訪ねてみたいけれども、誰かか志ある方も三螢同一場所同一時刻観測の役を仰せつかっては下さいませんか。

3. 長野県戸隠村戸隠高原奥社への入口、植物園内の湿地

山伏修行の修験者が参詣する戸隠山の登山口の一つでもある。県道のすぐ横に戸隠森林植物園の建物があり、その背後から随神門まで通じる木道に沿って、7月下旬に見ることができる。これは長野市の三石暉弥先生が平成13年7月上旬に全国ホタル研究会米沢大会にて発表され、その直後、私は同所を7月下旬に訪れ確認したものである。その年の気象条件によっては必ずしも三螢を同時に見られるとは限らないことを申し添えておきたい。

4. 福岡県山川町真弓

一級河川矢部川の支流飯江川の源流は杉林の中にある。その源流左岸のすぐ横を通っている林道の南側には真竹の竹林がある。杉林は或程度整備されているが、竹林は恐らくもう十年以上、人手が加えられていなくて、荒れるに任されているような状態となっている。その杉林と竹林(林道の両側; 左・杉林、右・竹林)の入口には水田(谷戸田)が拡がっている。毎年6月15日頃になると、谷川にゲンジボタル、水田にヘイケボタル、竹林にヒメボタル、杉林にはヒメボタルとゲンジボタルが群飛するのを見ることができる。ゲンジが少しピークを過ぎて少なくなりかけた頃、ヘイケが或程度数を増した頃が、ヒメボタルもかなり数が増える頃である。この場所は、川の源流域で標高が他の平地よりも或程度高くなっているのも、ちょうど三種の螢が同時に発生するチャンスを与えているのであろう。

以上、今年までの段階で、私が知り得るというか、私が実体験した三螢・四場所を挙げた。他にもこういう場所は全国に沢山あるだろうと思われるけど、既に二~三ヶ所の情報は前述の三石暉弥先生の許に届いているようである。

全国のホタル愛好者の皆さん、どうかこういう三螢を同時に見られる場所をどしどし探し出して、私に教えて下さい。そこへ私は飛んでいきますから。

御高配のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

事務局からのお知らせ

第5回談話会報告

去る2003年9月27日(土)、昭和女子大学におきまして第5回談話会が開かれました。東京都環境局自然公園課から松本行史さんを講師に招き、「ハンミョウの生活について」お話を伺いました。主な研究テーマであるトウキョウヒメハンミョウの生活を中心に、お馴染みのナミハンミョウなどについても、映像を交えながらお話しいたいただき、わかりやすく、かつ楽しい講演となりました。東京都下において、長年トウキョウヒメハンミョウの観察を続けてこられた経験から語られる松本さんのお話は、大変に興味深く貴重なものでした。



講演の後、会場全体での討論が行われ、活発な意見が交わされました。

講演の後、会場全体での討論が行われ、活発な意見が交わされました。

日本ホテルの会では、こうした談話会を年2回行っておりますので、ぜひご参加下さい。

第12回「ホテルを通じて身近な自然を考える」シンポジウム報告

恒例の日本ホテルの会シンポジウムが、今年も東京都恩賜上野動物園との共催により、上野動物園ホールにおきまして、去る2003年11月8日(土)に開催されました。当会の中心的行事である本シンポジウムも12回を数えることになり、これまで様々なテーマで開催してまいりましたが、昨年からは地域活動を話題としてとり上げて来ました。今年は、地域活動の中でも特に学校に関連する活動について講演をいただき、4題の内3つが学校を中心とするもので、残りの一つが地域のホテル再生活動を報告する内容となりました。

最初は、静岡県の松崎町立松崎中学校の土屋武彦さんから、町の中心を流れる那賀川におけるホテル保護、再生の活動が報告され、松崎中学校ホテル保護ボランティアによる、中洲での小川づくりやわさび田再生など、ダイナミックな活動が紹介されました。

2番目は、井上忠三さん等から東大和市立第七小学校のホテル保存活動の報告で、学内の活動として始まった保護活動が、保護者や卒業生を巻き込み、地域へと広がり、みんなで守り育てる活動に成長しつつある様子が紹介されました。

3番目の講演は、山梨県の南アルプス市立八田小学校におけるホテル復活に向けた活



動の報告で、この地域は、かつて宮入貝による地方病が発生し、その駆除のため、ホタルが見られなくなりましたが、わずかに残されたホタルを同校の生徒が見たことを契機に始まった再生への取り組みが紹介されました。

最後に、「ふっさホタルの水辺の里づくり」と題し、井上久彌さんから福生市における地域活動が紹介されました。自宅の水路でホタルを見た感動を、地域で共有したいという思いで始まった水辺の里づくりが、会場を楽しませました。

講演終了後、会場全体での総合討論が行われ、宮入貝の被害、駆除の話や生物の人為的な移動の問題など、一時間にわたって多くの意見が交わされ閉会となりました。

理事会報告

2003年9月27日及び2003年11月8日に理事会を開催しました。主な内容は、ニュースレター27号について、シンポジウムについて、日本ホタルの会ホームページの作成についてなどです。

読者投稿の募集

読者の皆様の体験、ホタルとの出会いなどを紹介する「私とホタル」を募集します。ご希望の方は、題名、氏名等と簡単な内容を記載して事務局あてお送り下さい。

本号に掲載の「三螢・四場所」は、三池南北こと永江秀作さんです。

おわび

2003年9月にお送りしました、会費の納入に係るお知らせに記載された振込先銀行の名称が、間違っていました。次のとおり訂正しますとともに、深くおわび申し上げます。

振込先銀行 変更前 第一勧業銀行
変更後 みずほ銀行

ホタルのニュースレター（第27号） 平成15年12月30日発行

編集 日本ホタルの会事務局

発行 矢島 稔

156-0041 東京都世田谷区大原2-17-6

ステーションプラザ代田橋410

(株)オーグラム内 日本ホタルの会事務局

TEL & FAX : 03-3328-7379

e-mail : KYW07337@nifty.ne.jp



印刷 システム印刷株式会社

191-0031 東京都日野市高幡454

TEL : 042-591-1411 FAX : 042-591-7701